

特集

「走れメロス」

——その魅力を探る

光村図書の中学校国語教科書に「走れメロス」が初めて掲載されてから五十年以上が経ち、学校現場ではこれまで、さまざまな切り口で授業が行われています。

今回、多様な視点から「走れメロス」の魅力を探る中で、あらためてこの作品のおもしろさを考えてみたいと思います。

わたしが思う「走れメロス」の魅力

太宰治の驚嘆すべき技巧について

思想家・神戸女学院大学名誉教授
内田 樹

太宰治は「一行目でいきなり読者をわしづかみにする。」

「死なうと思つてゐた」（『葉』）、「子供より親が大事、と思ひたい」（『桜桃』）、「恥の多い生涯を送つて来ました」（『人間失格』）。いつも太宰は単刀直入に、一氣に話の本題に入る。こちらは襟首をつかまれて、いきなり物語のど真ん中に連れてゆかれる。自分が「どういふ話」の中に連れてゆかれたのかわからない。物語はもう始まって、ずんずん進んでいる。こちらは早足で歩く作者の背中を追つてゆくしかない。

「走れメロス」で太宰は一行目から読者をいきなり古代ギリシャの市を歩むひとりの青年の心の中に放り込む。説明もなにもない。いきなり見知らぬ男の激情の中に私たちは投げられてしまう。

「メロスは激怒した。必ず、かの邪知暴虐の王を除かなければならぬと決意した。」
読者は困惑する。「メロスって誰だ？」
「王って誰だ？」「邪知暴虐って、何をした

んだ？」とにかく作家の次の言葉を待つしかない。それだけが読者にとっての「取り付く島」である。

「メロスは、村の牧人である。」それだけではわからぬ。
「笛を吹き、羊と遊んで暮らしてきた。」だからどうなんだ。

「けれども邪悪に対しては、人一倍に敏感であつた。」三行目にしてようやくメロスの「激怒」の所以がほの見えてきた。このときはすでに読者は作家の自家薬籠中に取り込まれている。掌中を転がされている。たいした力業である。

だが、この短編での太宰の工夫はそれだけではない。すでに気づいた人がいるかもしれないが、太宰は物語のどこどこに、「韻文調」を仕込んでいるのである。

「花嫁は、夢見心地でうなずいた。」

「私は、今宵、殺される。殺されるために走るのだ。」

「私は信頼されている。私は信頼されて

いる。」

「フィロストラトスでございます。」

七五調で整えるのはこれが「作り話」だ。というシグナルである。

ものはずみで「愛と信実」の話を書くことにはしたが、どうにも気恥ずかしい。とはいへ、こんな短い物語で作家の含羞を前面に出したら構成が破綻する。だから、表層を読み進む限り、何の屈託もなく、底意もなく、物語は淡々と展開する。けれども、音韻のレベルで作家は読者にひそやかな「目くばせ」をしている。

こんな話、あまり真剣に読むなよ、と。それがこの裏も表もないはずの物語にふしぎな厚みと奥行きを与えて、忘れがたいものになっているのである。



うちだ・たつる

東京都生まれ。思想家・武道家、神戸女学院大学名誉教授、東京大学文学部仏文科卒業。『下流志向』（講談社）、『本辺境論』（新潮社）など著書多数。私家版『ユダヤ文化論』（文藝春秋）で第六回小林秀雄賞を受賞。

特集

「走れメロス」——その魅力を探る

「走れメロス」のスピード感

作家・法政大学教授
中沢けい

「走れメロス」を読み返し、あらためて、その文章のスピード感に打たれた。冒頭で早くもメロスは暴虐な王の殺害を決心している。

「メロスには政治がわからぬ」「メロスは、村の牧人である」とメロスの性格を語る短い文章が続く。そして「メロスは単純な男であった」という一文が示される。この一文は正義感の強いメロスの性格を表すと共に物語の展開を速くしている。短く、そして、明瞭な一文が作品全体にスピード感を与えているのである。爽快なスピード感である。

このスピード感に飲まれると、政治に疲れた王の冷やかな心を見逃してしまふ。メロスが単純な男であれば、王は頭の回転が速すぎる男なのだ。頭の回転が速い王は「はは。命が大事だったら、遅れてこい。おまえの心は、わかつているぞ」とメロスが死を逃れる方法をたちどころに計算

して、メロスの耳元でささやくほどだ。これで、この物語にスリルが生まれる。メロスにささやかれた王の言葉はメロスにとっては誘惑であり、読者にとってはスリルとなる。

たった一人の妹の婚礼のために三日間の命乞いをしたメロスは故郷の村へと出発する。「初夏、満天の星である」という一文が伏線となつていくことなど、読者はまったく気がつかないだろう。人間が大きなものに包まれていることをその一文で味わう。伏線というのは、季節が初夏であり大雨が降りやすい季節であり、それがメロスの行く手を阻む展開がここから導き出されるのだ。

何でもないような短い文章の中に幾つもの伏線が隠れているところを拾い出せばキリがない。それもまた爽快なスピード感を呼ぶ仕掛けになつていく。このスピード感

が地中海地方の乾いた風土を語っているように感じられるのは、私が地中海地方を知らないためだろうか。

この作品が発表されたのは昭和十五年。東京で予定されていたオリンピックが日中戦争激化のために中止された年のことだと知った時、太宰治の中にあつた憧れがなんとなく解るような気がした。猜疑心によって次々と人を殺す王という存在は遠い昔のお話の中にもいるのではなく、きつとその時代の空気として存在していたのであろう。風を切る文章のスピード感をしみながら、そんなことを考える。



なかざわ・けい
神奈川県生まれ。作家、法政大学教授。一九七八年に『海を感じる時』(講談社)で群像新人賞、八五年に『水平線に』で第七回野間文芸新人賞を受賞。『黒潮と青海の物語』(集英社)、『動物園の王子』(新潮社)など著書多数。

耳を澄ます

—— 太宰治の再出発

群馬大学准教授
斎藤理生

太宰治は「無頼派」として知られている。だがその数奇な人生に目を奪われ、彼の作品におけるさまざまな試みが見逃されてはなるまい。昭和十一年に出版された第一創作集『晩年』には、小説という表現形式を問い直す実験作が多く収められている。たとえば「道化の華」は、主人公たちの世界を書き綴る「僕」が登場する、小説の小説である。注目されるのは、この「僕」が自身の書き方にも言及し、やがてその自己言及そのものにさえ言及するようになるという、際限のない相対化がなされている点である。

語り手が自分の言葉を絶えず疑う。そうした繊細な表現は先鋭化して行くに従って、一般の読者にはついて行き難いものになる。太宰は昭和十二年の秋から約一年間、小説を発表していない。そこに私生活上の問題が影響していたことは事実である。が、同時に彼は創作上の壁にも直面していたようだ。

昭和十四年ごろから太宰は旺盛な執筆活動を再開する。作家としての仕切り直しにあたって、彼はそれまでとは違う方法を見つける必要があつた。十五年に書かれた「走れメロス」は、そうした当時の太宰の課題を重ねて読めると考えられる。

「走れメロス」は「単純な男」が変わる物語である。当初メロスは「愛」「正義」「信実」といった言葉を支えにしていた。だが帰り道で力尽きかける過程で、それらの観念を疑い出す。ついには「正義だの、信実だの、愛だの、考えてみればくだらない」と言い放つまでになつて、意識を失う。

しかし彼は再び走り出す。そして刑場に辿り着く直前には、「何一つ考えていない」吹っ切れた姿を見せるようになる。

自分が絶対化していた考えを相対化すること。それはひとつの成熟であらう。だが相対化は後を引きやすい。自分を疑い、その疑った自分を疑い、その疑いを疑い……と、出口のない螺旋に陥りがちだ。その罠

からはどのように抜け出せばよいのか？

意識を失ったメロスを目覚めさせたのは水の音である。王と議論し、花婿を説き伏せ、懸命に自身を励ましながら走っていた饒舌な男が、ここでは「何か小さくささやきながら」流れる清水に「耳を澄まし」ている。太宰自身は、この作品を含め、十五年ごろからパロディを積極的に書くようになる。『駆込み訴へ』『新釈諸国断』『お伽草紙』などの名作が生まれる。他者の言葉という源泉に耳を傾ける方法。それは、自分の言葉を疑うあまり空転していくことを抑止する役目も果たしたはずである。



さいとう・まさお
香川県生まれ。群馬大学准教授。太宰治を中心とする日本近代文学研究者。研究誌「太宰治スタディーズ」発行のメンバーでもある。著書に「太宰治の小説の(笑)」(双文社出版)、「新世紀 太宰治」共著、双文社出版がある。

特集

「走れメロス」—— その魅力を探る

「学習の手引き」における「不易」と「流行」

信州大学教授
藤森裕治

「不易流行」とは俳諧における美の在り方を言い表した表現である。常に新しいものに変えていくとする流行性の中にこそ永遠に変わることのない本質（不易）があり、両者は根源において一つの在り方に統合される精神を言う。しかし世間では、この四字熟語の真ん中に「と」を入れ、物事の変わらない面（不易）と変わりゆく面（流行）を示すことが多い。保守と革新という言葉もあるように、巷間目にする事象を捉える上では、本義とは異なる使い方も誤用とは言い切れない側面がある。

それでは「走れメロス」における「不易」と「流行」は何か。そんな問いから注目したのが「学習の手引き」の変遷である。

光村図書の中学校教科書に「走れメロス」が初めて掲載されたのは昭和三十六年である。以後、何度か姿を消す時期を経て、現在は中学二年の国語科を代表する文学教材としての存在感を誇示している。

本作品の「手引き」に見い出される「不易」

は、「メロス」と「王」の心理と人物像を考えさせる課題である。これにかかる問いは「手引き」全体の六割強を占める。もとより登場人物の心理や人物像を問うのは文学の常だが、「走れメロス」ではその「変化」に光を当て、「メロス」と「王」という存在を比べながら読み取らせる点に特徴がある。一方、「流行」の典型は、読後感に対する問いの変化である。昭和四十四年度版で、「どの場面に感動したか」と問いかけていた「手引き」は、平成十八年度版になると「メロスの生き方について、共感できたか、できなかったかを話し合ってみよう」になっている。「走れメロス」を読めば感動することを前提とした「手引き」は、平成二年度版が最後である。近年はPISA型読解力を育成するため、作品を批評する活動が取り入れられている。

ある時期だけ登場した「流行」も少なくない。例えば昭和四十七年度版から平成二年度版にかけて、「朗読しよう」という課

題がある。この時期の学習指導要領は、領域が「表現」と「理解」の二項であり、両者をつなぐ言語活動として注目されていたのが朗読だった。

かくして「不易」も「流行」もある「走れメロス」の「手引き」だが、「不易」においても「変化」がキーワードとなっていることは象徴的である。国語教科書の文学作品中で、「走れメロス」は登場人物が圧倒的に多く、延べの人名名詞の数も三五六語と、二位の「故郷」を一〇四語も上回る。「走れメロス」とは、たくさんの人物を関係させながら「走る」変化する「物語」として読者をひきつけるのである。その意味では「不易流行」を体現した小説の典型と言えるかもしれない。



ふじもり ゆうじ
長野県生まれ。信州大学教育学部教授。専門は国語科教育学（授業研究、日本民俗学）。著書に「国語科授業研究の深層——予選不可能事象と授業システム——」（東洋館出版社）など。光村図書中学校「国語」教科書の編集員を務める。

子どもたちをひきつけてやまない作品

港区立赤坂中学校教諭
甲斐利恵子

「走れメロス」ほど、最初の一読で子どもたちをひきつける作品はないと思います。普段は教師の音読を集中して聞けない子も、この作品だと最後まで集中して耳を傾けます。それは、太宰の文章の魅力を、子どもたちが身体で感じ取っているからなのだと思います。

声を出して読ませ、言葉の世界に浸らせるのはもちろんですが、私は、「この言葉がいい」「作品のここがいい」「なぜいいと思うのか」……と、作品のすばらしさを楽しんで語り合うことで、「走れメロス」の魅力をより深く味わいたいと思っています。

そのため、三年前から「名場面・名言発表会」という実践を行っています（本誌P16参照）。「走れメロス」の中で、特に好きな場面を選び、その場面についての自分たちの思いを話し合い、まとめます。本文を朗読し、選んだ場面の中で名言だと思う文章を抜き出し、みんなで声に出して読みます。

この授業で大事にしているのは、「文章を声に出して読むこと」と「文学作品を語る語彙力を身につけること」。この作品を読んだことで、他の作品についても、いろいろな視点で読んだり語ったりできるようになるといいなと思います。

私の教室では、一年生のときに「星の花が降るころに」（二年）で、「作品のよさを語り合おう」という単元を学習しています。そこでは、「情景描写」「人物設定」「ストーリー展開」「心情の変化」など、作品のよさを語るための言葉を学び、自分の考えを二百字でまとめさせました。

「走れメロス」では、その学習も思い出させながら、作品のすばらしさをグループで話し合ってみようと思えます。一年生の子と違い、子どもたちは登場人物の心情の深い部分まで読み取っていきまします。「名場面」として多く挙げられるのは、メロスが走るのを諦めようとする場面。二年生の三学期にもなると、登場人物が複雑な心情を

抱えた、このような場面を選ぶようになるのです。それは、子どもたちの内面も複雑になってきているからなのかもしれません。

「約束を破ろうとするなんて、メロスは弱い人間だ。でも、誰しもそういう部分はありと思う」と、子どもたちはメロスを語りながら、実は、自分自身のことを語り始めます。メロスのおかげで、知らず知らずのうちに自分と向き合うことができるんですね。そういう意味でも、「走れメロス」は語りがいのある、すばらしい作品です。一、二年生で身につけた国語の力を総動員して臨みたい作品だと、私は思います。（談）



かい りえこ
福岡県生まれ。東京都港区立赤坂中学校主任教諭。専門は国語科単元学習。著書に、「子どもの情景」（共著・光村教育図書）、「聞き手話し手を育てる」（共著・東洋館出版）など。光村図書中学校「国語」教科書の編集員を務める。

特集

「走れメロス」——その魅力を探る